

んからだがやせ細って貧血がおきて死にいたりします。こういう状態をガンの悪液質といい、この原因物質を発見した中原和郎博士はこれを「トキソホルモン」と名づけた。

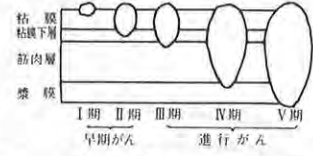
第四の特徴は出血しやすくなることで、胃ガンが進むと便に血液がまじり便が黒くなる場合があります。肺ガンでは血痰が出たり、子宮ガンも出血しやすくなります。

このようなガンの「くせ」をよく心得ておくことは、ガンの早期症状を理解するうえにも大切なことです。

また、ガンは遺伝するのではないかと心配する人がいます。有名なナポレオンの家系に胃ガンが多かったことからガンは遺伝するのではないかと疑う人が多いようです。しかしひとつの家族の中からガンが二、三人で起こることはよくありますが、三十歳代から五十歳代の死因ではガンが脳卒中や心臓病を抜いて三人に一人はガンで死ぬのですから、これからガンは遺伝するとは言えません。もしガンが遺伝するのなら、遺伝因子がまったくと同じ一卵性双生児がそろってガンになる率は、二卵性双生児に比べてずっと多いはずで、ところがデンマークで約七千組の双生児を調べた大がかりな調査でも差はほとんどありませんでした。

ガンそのものは遺伝しませんが、ガンにかかりやすい体質というものは遺伝するかもしれないと考えられます。胃ガン

図4、胃がんの進み方



胃ガンはまず胃壁の粘膜にできますが、この段階のものは「早期ガン」といわれ、この時期に発見し、治療すれば一〇〇%近く治ります。ところが、早期ガンには自覚症状のないことが多いので、これを早期に見出すには定期的に見査を受けることが第一です。

日本人のガンの特色は胃ガンが圧倒的に多いことで、昭和五十一年の全国の死者数は五万人を越え、男は全ガンの約三八%、女も約三二%を占めています。胃ガンはまず胃壁の粘膜にできますが、この段階のものは「早期ガン」といわれ、この時期に発見し、治療すれば一〇〇%近く治ります。

や乳ガンが同じ家族に多発する傾向がありますが、これは同じ屋根の下に住む家族は食生活や生活習慣もよく似ているので、こういう環境の影響も否定できません。体質と環境のどちらが原因にしても家族の一人が、あるガンにかかっていたら、ほかの家族も特に注意するに越したことはありません。

胃集団検診の一次検査は、X線間接撮影という方法で行われています。精密検査ではX線の直接撮影、透視、胃カメラ、ファイバースコープなどを使って診断しますが普通千人に一人か二人の胃ガン、そしてその十倍以上の胃潰瘍やポリープなどが発見されます。

三十年前、日本では毎年八千人も子宮ガンで死亡していましたが、子宮ガンによる死亡は年々減少しつづけて五十一年にはじめて六千人を割りました。これは診断面でも手術や放射線による療法が目覚ましく進んできたためです。そのうえ、子宮ガンに対する正しい知識が浸透して自発的に定期検診を受ける人がふえたこと、検診車や施設における集団検診が普及してきたことなどがその原因にあげられています。定期検診がさらに普及徹底すれば子宮ガン死亡が〇になる日もそう遠くはないようです。(図6)

%以上で、つまり健康な人がうけている定期検診の方が三倍も多く発見されています。胃集団検診の一次検査は、X線間接撮影という方法で行われています。精密検査ではX線の直接撮影、透視、胃カメラ、ファイバースコープなどを使って診断しますが普通千人に一人か二人の胃ガン、そしてその十倍以上の胃潰瘍やポリープなどが発見されます。

きな理由といわれています。わが国でも胃ガン患者には、昔から米食中心の偏った食事をつづけた人が多いことがわかりました。肉類、牛乳、緑黄色野菜や果物などを多く取り入れてバランスのとれた食生活に改善することが、胃ガンの予防に役立っているようです。

胃ガンをなくす運動でも一つ大切なことは食生活の改善です。アメリカでも今から四十年前は胃ガンが今日の二倍もありましたが、それが今日のように半減したのは、電気冷蔵庫の普及などで塩漬食品摂取の減少など食生活の改善が大いに功を奏したと見られます。

胃ガンをなくす運動でも一つ大切なことは食生活の改善です。アメリカでも今から四十年前は胃ガンが今日の二倍もありましたが、それが今日のように半減したのは、電気冷蔵庫の普及などで塩漬食品摂取の減少など食生活の改善が大いに功を奏したと見られます。

図5、胃がんの5年生存率(癌研調査区)

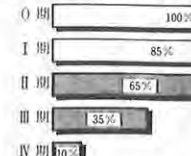
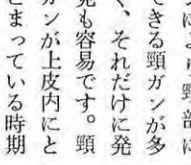


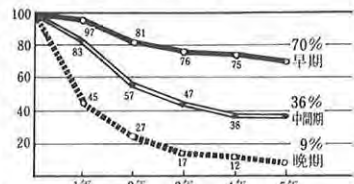
図6、子宮がんの5年生存率(癌研調査区)



を〇期といい、この段階ではほとんど症状がありません。この時期に発見し治療すれば一〇〇%治ります。それが進んで浸潤をはじめると、わずかな刺激で出血したり、色のついたおりものなどの症状が出てきます。さらに腫や骨盤にまで拡がると治療しても段々治りにくくなってきます。

子宮ガンの集団検診は、子宮の頸部を綿棒かヘラで軽くこすって材料を採り、これをガラス板に塗って染色し、ガン細胞があるかどうかを顕微鏡(細胞診)で調べます。集検受診者千人に一人か二人の割合で子宮ガンが発見されています。三十歳をこえると子宮ガンにかかる率が急にふえますので、恥しがらずに集団検診を受けるようにしましょう。

図8、肺ガンの治療成績



死者は一万五千八百六十七人となりました。近年男子ばかりでなく女子にもふえてきています。(図7)

肺ガンは発生する場所によって肺野型と肺門型に分けられます。気管支の末梢や肺葉の奥にできる肺野型は胸のX線写真で見えますが、肺門型は太い気管支にできるためX線写真ではとらえにくく、気管支鏡や喀痰の細胞検査で見つけます。治療技術の進歩によって、肺ガンも早く発見すれば七〇%以上治るようになりました。

や生活様式の欧風化でこの傾向はますます顕著になってきました。いちばん多い年齢は四十歳から五十歳代です。乳ガンのできやすい位置は乳房の外側上が五〇%で最も多く、ついで内側の上方が二〇%、乳首附近が一五%、外側下方が一〇%、内側下方が五%となっています。

乳ガンは女性ホルモンのバランスの乱れが原因といわれますが、特に①初潮の早かった人、②未婚か晩婚の人、③子供が少ない人、④離乳が早く、人工中絶の回数が多い人などは日常気をつけて早期発見を心がけて下さい。

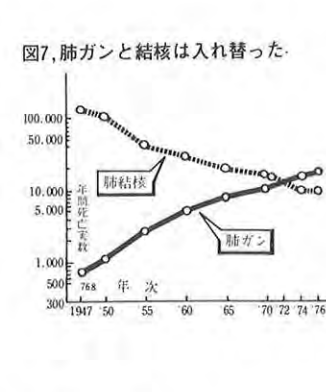


図7、肺ガンと結核は入れ替った

健康な人も年一回胸部検診をうけることが必要ですが、とくに四十歳以上の男子で、大気や環境の汚染地区に住む人、タバコを多量に吸う人などは高危険群とされており、年一回X線検診と喀痰検査をうけることが大切です。

ガンの危険信号 8カ条

★ガンは無症状のうちに芽ばえます。とくに胃、子宮、乳房、肺などは、年一回検診を受けて、安心しましょう。

★つぎのような症状があったら、すぐ専門医に診てもらいましょう。

1. 胃……胃の具合がわるく、食欲がなく、好みが変わったりしないか
2. 子宮……おりものや、不正出血はないか
3. 乳房……乳房の中にシコリはないか
4. 食道……のみこむときに、つかえることはないか
5. 大腸、直腸……便に、血や粘液がまじったりしないか
6. 肺……咳が続いたり、痰に血がまじったりしないか
7. 舌、皮膚……治りにくい潰瘍はないか
8. 腎臓、膀胱、前立腺……尿の出が悪かったり血がまじったりしないか

—日本対ガン協会制定—